

# 日本におけるシュトルム文学の受容

## —没後百年を記念して—

田 中 宏 幸

十九世紀後半ドイツ写実主義の作家テーオドル・シュトルムの名は、なにより、その抒情的短編小説『みずうみ』すなわちインメンゼー Immensee の作者として我国の一般の読者にもかなり親しまれてきた。この小説の翻訳は1914年以来既に戦前に数点を数えるが、とりわけ1945年以後の戦後に多数の訳者により繰返し出版されている。これ以外の作品も、先ず主に初期の作品を中心に戦前から翻訳が進められ、1960年頃までにその重要な作品はほとんど翻訳されるに至った。また『みずうみ』、『マルテとその時計』 Marthe und ihre Uhr, 『広間にて』 Im Saal などの初期の作品から『アンゲーリカ』 Angelika, 『遅れ咲きのぼら』 Späte Rosen などの作品を経て『プシューヒェ』 Psyche に至る多くのノヴェレやメールヒェンがドイツ語授業のテキストとして好んで用いられてきた。このような状況を見れば、1967年9月シュトルムの生地フーズムで開催の詩人生誕百五十年記念シンポジウムに招かれた高橋健二氏が「テーオドル・シュトルムは明らかに、日本で最も愛読されているドイツの詩人の一人である」<sup>1)</sup>と報告されたのはもっともであろう。この報告に代表される当時の状況は、日本のシュトルム文学受容の積極性を示すものとしてドイツでも高く評価され、これは現在にまで及んでいる。外国でのシュトルム文学の受容について語られるときには、ほとんど例外なく日本の強い関心が注目されている<sup>2)</sup>。

しかしシュトルムは、なお我国でかつてのように読まれているのであろうか。1984年某書店からシュトルムの全作品の翻訳出版の予告と共に、その初期の作品『マルテとその時計』より『館にて』 Im Schloss に至る13のノヴェレを収めた1巻が刊行された<sup>3)</sup>。その念入りの造本は、いかにもシュトルム文学のゆるぎない受容を象徴するかのようであったが、その売れ行きは芳しくなかったらしく、この計画は挫折したかのようである。これは残念ながら、まさにシュトルム文学の現在における受容の消極性を印象づける結果ともなった。またカタログなどで判断する限り、そのテキスト出版にも減少傾向が感じられる。また現在の大学生の読書傾向についての或る資料によれば、幸いなことに文学への関心は非常に高く、ドイツ文学についてもヘッセ、マン、カフカ、エンデそしてカロウじてゲーテも現われるが、残念ながらシュトルムの名は全く登場しない<sup>4)</sup>。やはりシュトルムは読まれなくなったのであろうか。しかしそれでも無さそうである。例えば、かの岩波文庫では初期の作品を中心とした2～3冊が今も版を重ねているらしく『みずうみ』は1987年11月に39刷、1988年6月には40刷が発行されている。これは、

## 田 中 宏 幸

その文学が、なお静かに、しかし確実に新しい読者を見出している証拠であろう。そして今年2月、同文庫で久しく絶版となっていた『白馬の騎士』*Der Schimmelreiter* が復刊されたことはまことに喜ばしいことである。因にシュトルムが死の病と闘いながら、この運命悲劇物語を完成したのは正に1世紀前の1888年2月のことであつた。シュトルムはこの年の7月4日ハーデマルシェンの我家で、家族に見守られながら世を去るが、今年丁度百年、その文学はどのように読まれ、受け入れられてきたであろうか。ここに我国における状況を、宮内芳明氏により作成された書誌などの資料を参考に<sup>5)</sup>、その概要を報告する。

## I

1888年7月5日——シュトルムが亡くなった翌日——4年間の留学を終えた森鷗外は、最後の滞在地ベルリンを出発、帰国の途についている。周知の如く鷗外は医学を修めるために渡独したのであるが、同時にその文学・芸術にも深い関心を示し、これを熱心に研究している。この鷗外はまた恐らくシュトルムの作品を読んだ最初の日本人であつたと想像される。鷗外は1884年(明治17年)8月日本を出発、同年10月より翌1885年10月まで先ずライプチヒに滞在するが、ここで鷗外はパウル・ハイゼ *Heyse, Paul* とヘルマン・クルツ *Kurz, Hermann* 共編の『ドイツ短編小説集』*Deutscher Novellenschatz* 第9巻に収められたシュトルムの1876年発表のノヴェレ『画家の作品』*Eine Malerarbeit* を読み、最後の余白に「前後二図。照応極妙。七月八日。」と書込んでいる<sup>6)</sup>。また作中の登場人物へのアンダーラインや二枚の絵の記述の部分の欄外のマーク・ラインなど鷗外のものと思われるが、かなり丁寧に読んでいることが察せられ、またその読後感も短いながらも的確な評というべきであろう。このハイゼ・クルツ編の小説集は全24巻を数えるが、次に滞在するドレスデンでも読み続けられ、このことごとくを読破したらしい<sup>7)</sup>。次いで1886年3月から滞在したミュンヘン及び1887年4月から滞在のベルリンでは『新ドイツ短編小説集』(ハイゼ他編)が読まれたらしいが、ここにシュトルムの重要な作品の一つである『水に沈む』*Aquis submersus* が含まれている<sup>8)</sup>。恐らく鷗外はこの作品も読んだであろうと推定される。この他平川祐弘氏によると鷗外は後に1906年刊行のシュトルム全集(Westermann版)を購入しているらしく、この作家への関心が推定される<sup>9)</sup>。しかしその翻訳や評論などは知られていないし、またその創作にどのような影響を及ぼしたかは不祥で、それは今後の研究によらなくてはならないであろう。

この少し後の1903年(明治36年)には、西欧詩の格調高い翻訳により、日本詩壇に大きな影響を及ぼした上田敏が、シュトルムの詩『水無月』*Juli* を『万年草』に発表している。これは1905年には有名な『海潮音』にハイネやアレント、カール・ブッセなど他のドイツの詩人の訳詩と共に収録された<sup>10)</sup>。この『水無月』はまた、その5行目の「小河には木の葉みちたり。」の誤訳でも知られているが、その「陶醉と魅惑」を誘う美的言語表現によりこれを補なって余り

ある名訳となっている。この原文はヤコボフスキー Jacobowski 編の『新抒情小曲集』 Neue Lieder der besten neueren Dichter für's Volk (Berlin 1899) 所収とされているが<sup>11)</sup>、このユーゲント・シュティール風のタイトル・ページに飾られた小型の詩集には308編の詩が収められている。そのなかでシュトルムの作品は他の詩人が大抵1～4、5編に留まっているのに比べて11編を数えているのは注目されよう。因に鷗外もこの詩集を所有していた<sup>12)</sup>。上田敏はまたこの名訳に先立って1900年(明治33年)雑誌『太陽』に掲載の『十九世紀文芸史』の第三章『十九世紀の独逸文学』においてシュトルム(敏の表記では「テオドル・ストゥルム」)について触れ、その作品として『アクイス・スブメルズス』、『プシュヒェ』を挙げている<sup>13)</sup>。もっとも彼がこれらシュトルムのノヴェレをドイツ語で読んだとは思われないが。

これらはいわば我国のシュトルム受容の端緒をなすものであるが、やがて先ず旧制高等学校でのドイツ語授業のテキストとしてその作品は迎え入れられる。そしてまもなく翻訳が刊行され、次第に一般の読者にもシュトルムは親しまれるようになるのであろう。このような受容過程の比較的初期の状況は、恐らく平川氏が示された木下杢太郎、そして昭和に入ってから立原道造に、その軌跡をたどることができよう<sup>14)</sup>。

木下杢太郎は1903～06年(明治36～39年)一高で岩元禎のドイツ語・ドイツ文学講義から強い影響を受けている。杢太郎自ら特にゲーテの『イタリア紀行』について、その受けた「多大の薫陶を銘意」している<sup>15)</sup>。これは筆者の想像に過ぎないが、この岩元教授が多分シュトルムについても、直接そのテキストを読まなかったとしても、少なくとも間接的にその文学について語ったことであろう。1899～1941年に及ぶ42年間に岩元禎が読み続けたテキストのなかにはシュトルムの『白馬の騎手』も含まれていたらしい<sup>16)</sup>。ともかくも杢太郎は或る時期シュトルムから影響を受けたことを自らも述べている<sup>17)</sup>。特に『みずうみ』に挿入されている詩『きょうのみ』 Heute, nur heute にひかれたらしく、平川氏によると1907年9月新聞にこの翻訳を発表したらしい。さらに同氏はこの詩の影響がその詩作にも及び、実に「杢太郎自身のリズムと化して」いることを明らかにしておられる。因に杢太郎が尊敬していた鷗外の知己を得たのは1907年の秋のことであったが、「二人はシュトルムという共通の話題を通して近づきになったのである。」なお、平川氏の言及によると、このシュトルムの詩のまた別の翻訳が「夏目漱石の目にふれ好評をかちえていた」のである。興味深いことである<sup>18)</sup>。

杢太郎のシュトルム受容の中心は『みずうみ』、とりわけその挿入の抒情詩であったが、夭折の詩人立原道造もまたシュトルムのこの作品の抒情性に深く心ひかれた。立原は1931～34年(昭和6～9年)一高理科に在学、竹山道雄指導のもとに『みずうみ』を読んだようであるが<sup>19)</sup>、この「ラインハルト・エリーザベトの物語」は立原の生来の抒情的感性に深く共鳴したかのようなのである。その「原稿にあふれた文章が……あふれ注いでいた感じがかった」<sup>20)</sup>と犀星が評した美しい書簡の数々にシュトルムとその作品、そして立原自らが淡いおもいを寄せていた女性に重ねられたエリーザベトの名が認められている<sup>21)</sup>。

シュトルムのこの作品は、しかし、その『萱草に寄す』SONATINE NO. 1 冒頭のソネット

田 中 宏 幸

『はじめてのものに』の最後の節に結晶している。

いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか  
火の山の物語と……また幾夜さかは 果たして夢に  
その夜習ったエリーザベトの物語を織った<sup>23)</sup>

この『みずうみ』は物語『鮎の歌』の『ちひさき花の歌』にもその影を落としている<sup>23)</sup>。なお、立原はさらに4編のシュトルムの作品の翻訳も試みている<sup>24)</sup>。

このような木下杢太郎や立原道造に見られる影響は、もちろんただ創造的な詩人のものであろうが、一般的にも、シュトルム文学のグルントトーンであるインメンゼーに代表される抒情性は、また、ドイツ語のテキストとしてのレクラム文庫などを通して、旧制高校に学んだ当時の多くの青年の感性を揺り動かしたに違いない。一つの証言を引用しよう。

「『みずうみ』は旧制高校生の必読の書であった。白線のシンボルのような清潔な恋愛小説だった。私も昭和十年頃読んだと思う。……私は甘い感動にひたったことはたしかである。……それは……人生にふれたほんものの甘さだったと、私は今にして思う。……」<sup>25)</sup>

II

木下杢太郎や立原道造がシュトルムを読んだのはレクラム文庫などの原書であったようであるが、やがて我国のドイツ語教科書出版も次第に盛んになり、シュトルムのテキストも刊行されるようになったらしい。例えば1913年（大正2年）からドイツ語教科書・参考書を出版してきた郁文堂の刊行書目リストによれば<sup>26)</sup>、シュトルムに関しては先ず1918年に Immensee の対訳が刊行され、最初の教科書としては In St. Jürgen（1923年）、そして Kleinere Erzählungen（1924年）、やや遅れて Immensee が1931年（昭和6年）に出たようである。この後少し離れて1939年に Carsten Curator が出ているが、それほど頻繁というわけでもない。なお対訳に関しては引続き1926年には『シュトルム小品集』、1928年には『遅れ咲きのぼら』が出版された。この後のシュトルムのテキストの刊行は戦後を待たなくてはならなかった。すなわち1949年（昭和24年）久々に Psyche が刊行される。この後、割合頻繁にシュトルムの教科書が出版されている。順に挙げれば次の通りである。

- 1950年 Ein stiller Musikant, Sommergeschichten (Marthe und ihre Uhr; Im Saal; Im Sonnenschein)
- 1951年 Ein Bekenntnis
- 1952年 Von Jenseits des Meeres
- 1953年 Die Regentrude
- 1954年 Immensee (改版)
- 1955年 Marthe und ihre Uhr (In: Fünf Novelletten)

- 1956年 Späte Rosen
- 1958年 Psyche (改版)
- 1959年 Marthe und ihre Uhr
- 1962年 Am Kamin
- 1965年 Hans Bär
- 1976年 Lore (aus “Auf der Universität”)

以上は、もちろん一出版社の資料の示すところであるから、全体的な傾向をうかがうことは、もとより無理であろうが、しかし教科書におけるシュトルムの受容の大凡の状況が分かるであろう。すなわち一部ではレクラム版などが引続き用いられていたから断定はしにくいだが、この資料からみる限り戦前より、むしろ戦後の一時期、恐らく1950～60年代にシュトルムは好んで読まれたのではないかと推定される。もっとも旧制高校時代に比してドイツ語学習人口が急激に増加したことも関連しているかも知れない。しかし、これは何より当時の多数の教授者がシュトルムに関心を持つか、少なくともドイツ語教材として適当と判断していたからに違いない。それは恐らくシュトルムの多くの作品——特に初期の作品——にみられる比較的容易な言語表現・文体、理解し易い内容、均整のとれた形式、そして、とりわけそこにただよう抒情性などに影響されたものであろう。従って一部を除き初期の作品のテキストが多い。

こうして1967年頃には Immensee のテキストは2種の対訳を含めて実に10種類に及んでいる<sup>20)</sup>。これはまことに驚くべき数である。しかも、この状況は現在まで継続されている。すなわちこの抒情的短編小説のテキストは現在なお7社から発行されていて、我国のシュトルム受容、特に教科書の分野の受容状況を特色づけている。

これ以外、現在（1988年秋）も入手可能なシュトルムのテキストは7社から18作品、24点刊行されている。それは

Marthe und ihre Uhr ; Im Saal ; Immensee ; Posthuma ; Der kleine Häwermann ; Ein grünes Blatt ; Angelika ; Wenn die Äpfel reif sind ; Am Kamin ; Späte Rosen ; Veronika ; Auf der Universität ; Von Jenseits des Meeres ; Die Regentrude ; Bulemanns Haus ; In St. Jürgen ; Psyche ; Von Kindern und Katzen

のノヴェレやメールヒェンである。これを見るとシュトルムは、かなり読まれているといえるかも知れない。しかし郁文堂の最近のカタログ（1988年）に掲載の265点の翻刻テキストのうち文学関係は152点、この77.6%の118点が現代文学、十九世紀リアリズム以前は34点という状況から、現在のドイツ語教材選択の傾向は、現代文学、或は文学以外の分野に向かっているのではないかと推定される。もつとも34点のうち6点はシュトルムではある。三修社でも133点の文学テキストのうち最も多いのは Mann の10点、Böll の9点、次いで Rinser 7点などで、リアリズム以前は24点——この中にシュトルムは3点含まれているが——に過ぎない。シュトルム文学にとって、これは決して有利な情勢ではない。また、これまでテキストとして刊行された37作品——点数にして恐らく70以上——という数からみれば、現在入手できる作品はや

## 田 中 宏 幸

はり減少したといえよう。例えば最近まで入手できた Im Sonnenschein; Unter dem Tannenbaum; Abseits; Lena Wies; Eine Halligfahrt; Ein stiller Musikant; Carsten Curator; Es waren zwei Königskinder などにはもうカタログから姿を消している。やはり先にみた郁文堂の場合と同様に、全般的にもシュトルムの教科書は1950～60年代に最も頻繁に刊行されたようである<sup>28)</sup>。この点では1980年代に刊行された Der kleine Häwelmann (Posthuma, Von Kindern und Katzen); Ein grünes Blatt そして Immensee の英語対訳版は注目されよう。

要するに、現代文学や、よりアクチュアルな、或は実用的なテキストが、より好んで選択される状況下で、シュトルムのテキストの一般的な退潮は否定できない。しかし Immensee を中心とした初期の作品が、なおテキストとして、かつてほどではないにしても、新しい世代の学生たちに何らかの影響を与えてはいるであろう。

なお、抒情詩もノヴェレに挿入されたもの以外に、数は少ないがテキストとして紹介されている。例えば Die Stadt; Einer Toten が同学社版の Marthe/Im Saal の1冊に収められている。これ以外に Die Stadt は Schinzinger: Das deutsche Gedicht (第三書房)にも解説テキストと共に収録されている。この2冊は現在も入手可能である。これに加えてこれまで Oktoberlied; Juli; Meeresstrand なども紹介されてきた。またこの関連で、有名なトーマス・マンのシュトルム論もテキストとして上梓されていることも付け加えておきたい。これはさすがに1958年の初版以来、残念ながら版を重ねていない。ここにもかなりのシュトルムの抒情詩が引用されていることは周知の通りである。

## III

我国初のシュトルムの作品の翻訳は、『シュトルム書誌』によると1914年(大正3年)出版の『湖畔』Immensee であった。これに続いて1921年に再度『インメン湖』が上梓されている。この後、別の作品の翻訳が出版されるのは1926年であるが、この年には Marthe und ihre Uhr; Im Saal; Posthuma; Der kleine Häwelmann; Im Sonnenschein; Angelika; Wenn die Äpfel reif sind; Späte Rosen; Die Regentrude と一部対訳を含むが、急に数が増える。これ以後次第に新しい作品が加わっていくが、1964年までに主要な作品のほとんどを含む40のノヴェレやメールヒュンなどが日本語になった。最後に少し離れて1984年にさらに1作品が加わった。以下我国の翻訳からみたシュトルム受容の概要を知るために、初訳が出た順にこれらの翻訳作品のリストを示そう。

1935年 Viola tricolor; Aquis submersus

1936年 Veronika (立原道造訳)

1937年 Der Schimmelreiter

- 1940年 Von Jenseits des Meeres; In St. Jürgen; Lena Wies; Pole Poppenspäler;  
Carsten Curator; Hans und Heinz Kirch; Schweigen
- 1941年 Im Schloss; Zur Chronik von Grieshuus
- 1944年 Bulemanns Haus
- 1947年 Auf der Universität
- 1948年 Drüben am Markt; Der Spiegel des Cyprianus
- 1949年 Ein stiller Musikant; Psyche
- 1950年 Es waren zwei Königskinder; Ein Doppelgänger; Ein Bekenntnis
- 1955年 Beim Vetter Christian; John Riew'
- 1958年 Ein grünes Blatt; Eekenhof
- 1959年 Im Nachbarhause links; Bötjer Basch; Ein Fest auf Haderslevhuus
- 1964年 Hans Bär
- 1984年 Auf dem Staatshof

こうして今日まで、抒情詩は別として、シュトルムの全作品58篇の凡そ7割が翻訳されるに至ったのである。しかし、それにしてもこの41作品のうち24篇——それは全作品の半分ではないが4割に当たる——が早くも戦前に発表されているのは、当時のシュトルム文学への相当な関心を示すものとして、注目されよう。

ところで我国のシュトルム翻訳史の扉は Immensee によって開かれたのであるが、それは当然といえば当然であった。シュトルムの他の作品の受容はドイツでも、決して芳しいものではなかったのにひきかえ、作者の生前既に30版を重ねていたこのロマンティックな物語は、やはりその代表作であろうし、一般的にも受け入れられやすい一種の魅力をもっているからである。しかし、最後の大作とされる Der Schimmelreiter の翻訳『白馬の騎者』(田内訳)及び『白馬の騎手』(茅野訳)も既に1937年に刊行されている。ドイツでも再版が刊行されるまで実に30年以上を要したことを思えば、これは正に快挙といわなくてはならない。また、この2年前の1935年刊行の『溺死』(伊藤武雄訳)の原作 Aquis submersus も発表当時既に、その価値を認められながらも、一般には大きな反響を呼ぶには至らず、シュトルム生前には、わずか再版をみたに過ぎない。因に、この『溺死』は、作者自らも傑作と信じていた『三色すみれ』Viola tricolor と共に岩波文庫の最初のシュトルムの一冊となった。1940年刊行の『北の海』Hans und Heinz Kirch、『沈黙』(共に国松孝二訳)、そして、その翌年刊行の『グリースフース年代記』(中村政雄訳)は何れもシュトルム晩年のハーデマルシェン時代の1882~84年の作品である。これらの重要な後期の作品の翻訳が、比較的早いこの時期に刊行されているのをみると、我国のシュトルム受容は、読者の数はともかくとして、質的には、既に当時かなり高いものであったと推定される。そして、必ずしも抒情的・牧歌的なシュトルム像のみが伝えられていたわけではないことが分かる。先にみたドイツ語テキストの分野で、主に初期の作品が読まれていたとすれば、それは何より原文の容易さに、その原因があったのであろう。

## 田 中 宏 幸

さて以上のリストでみる限り戦前と戦後の情況には余り相違が感じられないが、実は翻訳出版の総点数からみると戦後の方が圧倒的に多く、『シュトルム書誌』に収録されている252点の翻訳のうち209点が1945年以後の戦後の出版で、これは実に83%に相当する。年代的には1950～60年代に最も多く、従ってシュトルム文学は、戦後のこの時期に一般的に広く読まれるようになったのではないかと想像される。なかで最もしばしば取上げられたのは Immensee で、少ないといっても戦前既に5点を数えていたが、1984年まで、実に21人の訳者により、改訳・改版も含めて34種の翻訳がくりかえし上梓されている。これに次ぐのは Viola tricolor (1/16), Marthe und ihre Uhr (2/9), Im Saal (4/7), Angelika (2/9), Späte Rosen (3/8), Veronika (2/9), Pole Poppenspäler (1/9), Wenn die Äpfel reif sind (3/6), Auf der Universität (1/8), Psyche (0/9), Aquis submersus (1/8), Der Schimmelreiter (2/7) などの作品である。( ) 内の数字は夫々戦前/戦後の点数を示している。これらの数字を見れば戦後の翻訳出版の盛況がうかがえる。

ここでシュトルムの作品を、一応 Draussen im Heidedorf (1871) を境にして作品群を二分して、その翻訳点数を比較して見ると、それぞれ22作品に166点、19作品に90点の翻訳があり、前者は戦前に34点、戦後に132点、また後者では夫々9点と81点という数字がみられる<sup>29)</sup>。ここには初訳のリストでは見られなかった傾向が暗示されている。すなわち、やはり全体的に見て初期の作品の方が多く訳され、特に戦前にこの傾向が強いことが分かる。戦後は前期の作品については、さらに131篇の翻訳が現われるが、これに対し、後期の作品については81篇、これは戦前の出版の実に9倍に相当する。シュトルムの後期の作品の一般的な受容は、やはり大勢は戦後ということになる。

戦後の1950～60年代のシュトルム文学受容の積極性を象徴するのは、1947～50年に郁文堂より刊行された4巻の『シュトルム選集』及び1958～59年刊行の清和書院版『シュトルム選集』8巻であった。前者は16の作品を収めるに過ぎないが、後者は、小型の造本ではあるが、代表的作品を殆ど網羅する33ノヴェレを収める初の本格的作品集であった。訳者としては伊藤武雄、川崎芳隆、国松孝二、関泰祐、菅原政行、高橋健二、高橋義孝、中村政雄、春田伊久蔵のそうそうたるドイツ文学者の名が見える。この作品集がどのくらいの読者を集めたかデータはないが、添付の月報などに寄せられたエッセイや読者の声などで判断する限り、明らかに歓迎的雰囲気を感じられる。ともかくも、これは我国シュトルム受容史における記念すべき出版ではあった。しかし戦後いち早く出版された郁文堂の『選集』はもとより、後者も久しく絶版で入手は極めて困難な状況である。しかし、先述のように1984年の企画が挫折したとなれば、清和書院版選集は目下のところ依然として、最も充実した日本語のシュトルム作品集ということになる。

ところで一般の読者に対する影響ということになれば、岩波文庫に代表される文庫版はやはり無視できない存在であろう。『シュトルム書誌』に収録されている文庫版のうち、岩波、角川、河出、近代、現代教養、新潮、創元、旺文社の8文庫の作品別総翻訳数は70点に達する<sup>30)</sup>。



このなかで戦前の出版は、岩波の9点だけで、他はすべて戦後の主に1950～60年代に初版が出ている。特に50年代が多く51点を数える。このうち詩集が3点含まれているが、それ以外の作品29篇、最も多いのは、当然 Immensee で10点、次いで Viola tricolor (6)、Späte Rosen (5)、Im Saal (4)、Angelika (4)、Veronika (4)、Psyche (4)、In St. Jürgen (3)、Aquis submersus (3) などであり、やはり前期の作品に重点が置かれている。全体的にも前期16作品42篇、後期13作品25篇という割合になっている。一方このなかで最も作品数が多いのは岩波で18篇、これに次ぐのは角川の14篇、創元の10篇である。岩波はどちらかといえば前期の作品、角川は後期の作品にかたよっている。詩集は角川(2冊)と旺文社で出版された。以上出版点数からみれば、やはり Immensee に代表される受容状況が浮かんでくるであろう。

実際の出版部数については岩波文庫の場合が参考になろう。『みずうみ』は1936年来35万部、因にドイツ文学部門の最高はゲーテの Werther で40万部、シュトルムの Immensee の巻は2位を誇っている。シュトルムの他の巻は以下の部数を示している。『三色すみれ・溺死』8万部、『大学時代・広場のほとり』7万部、『海の彼方より・聖ユルゲンにて』10万部、『美しき誘い』14万部、『白馬の騎手』5万部である。以上は岩波文庫編集部より提供された今年6月のデータである<sup>30)</sup>。岩波文庫の単純平均部数は約68,000部と推定されるから、これはやはり Immensee の人気を示すデータであろう。

これら手軽な文庫版は、しかし現在も入手可能なのだろうか。少なくとも岩波文庫では現在の13作品が入手できる<sup>30)</sup>。

『みずうみ 他四篇』 Immensee ; Marthe und ihre Uhr ; Im Saal ; Wenn die Äpfel reif sind ; Späte Rosen

『大学時代・広場のほとり 他四篇』 Drüben am Markt ; Posthuma ; Ein grünes Blatt ; Angelika ; Lena Wies ; Auf der Universität

『白馬の騎手 他一篇』 Der Schimmelreiter ; Im Sonnenschein

これに加えて文庫版ではないが『シュトルム全集 第二巻』(柴田齊訳)により Auf dem Staatshof ; Veronika ; Im Schloss が入手可能である。

詩集の翻訳については戦後の1952年以来8点の選集が刊行されていて、筆者の知る限りでは目下、少なくとも『シュトルム詩集』(吉村博次訳)が手軽に入手できる。

ここで最後にこれまで未翻訳の作品を挙げれば

Hinzelmeier ; Am Kamin ; Unter dem Tannenbaum ; Abseits ; Eine Malerarbeit ; Der Amtschirurges—Heimkehr ; Eine Halligfahrt ; Draussen im Heidedorf ; Zwei Kuchenesser der alten Zeit ; Von heute und ehemals ; Waldwinkel ; Von Kindern und Katzen ; Renate ; Zur Wald- und Wasserfreude ; Im Brauerhause ; Die Söhne des Senators ; Der Herr Etatsrat

の17作品である。なお重要作品が数篇含まれている。

## IV

このようにシュトルム文学は、我国で、比較的早くから、原書、教科書そして翻訳として親しまれてきたが、研究論文ということになると1945年以前には存在しないかのようなのである。例えば東京帝国大学独逸文学研究会編の『エルンテ』や『独逸文学』などには関係論文は見当たらないようである。恐らく当時のシュトルム研究は、テキストや翻訳に添えられた解説・解題などに反映されるにとどまったのであろう。もっとも、このような形の解説・論評も、いわゆる論文ではないが、シュトルム文学への道を指し示すものとして貴重である。例えばそのような論評のなかで、戦後の比較的早い時期1947年に刊行された翻訳『黄昏れゆく青春』（川崎芳隆訳）の巻末の解説は、優れた一篇のシュトルム論であろう。ここには、先にも見たような『湖畔』に代表されるシュトルム受容についての反省が促されている。また下って1966年刊行の文庫版『みずうみ』（石丸静雄訳）に付された、年譜を含む解説もシュトルム文学案内の優れた一例であろう。

ところで、このような解説類を除けば、我国最初の研究論文は『シュトルム書誌』の冒頭に挙げられている1949年に発表された

守永敏夫：マンとシュトルム——その Ethos を中心として (1)<sup>33)</sup>

— :シュトルム論二つ (2)

ということになる。この後、1952年には五木田浩氏の『郷土詩人としてのシュトルム』など(4,5)、1953年には同氏の『白馬の騎手』論(6)、そして1956年にはシュトルムの「宗教観」、翌年にはその「世界観」についての2論文が田川基三氏により発表される(8,9)。同1957年には菅原政行氏は、ドイツ語文の“Ein Doppelgänger”論(10)を発表、次第にシュトルム研究も活気を呈してきた感がある。1958年には菅原氏はさらに同じくドイツ語文で“Eekenhof”論(12)を公刊された。同じ年、田川氏は『白馬の騎者について』(14)、また翌年にはシュトルムの小説の「形態的考察」(15)を発表された。五木田氏はさらに1960~61年にかけてシュトルムの「政治問題」、「政治的姿勢」、「法律」との関係などについての研究(16,17,18)を相次いで発表、さらに1963年にはゲーテとの、また1964年にはメーリケとの関係について考察された(20,23)。この3年後の1967年、石丸氏が特にベルタ・フォン・ブーハンとの関係をめぐる詳細な研究の第一部(24)を発表される。この年は丁度シュトルム生誕百五十年の記念の年に当たるが、五木田氏は“Hans Bär”論(26)を発表される一方、

Theodor Storm in Japan (日本におけるシュトルム関係資料)

——詩人の生誕150年を記念して——<sup>34)</sup>

において、1967年当時までの本邦シュトルム関係文献をまとめられた。これは『シュトルム書誌』の基礎資料としても用いられたが、受容史からみても貴重な記録である。

ところでこの年、同氏はフーズムから記念国際シンポジウムに招待されたが、病のためこれを果たさず、代わりに高橋健二氏が出席され、1967年までの我国のシュトルム受容の概要につ

いて

Theodor Storm und Japan (28)

として報告された。戦後の1949年から、この年までのシュトルム研究論文は『シュトルム書誌』によれば27篇を数えるが、高橋氏は当時なお、「本来のシュトルム研究は日本では始まったばかりである」と報告されている。その通りであろう。そして1967年以後はどのような状況であろうか。同書誌には、1967年から最近の1988年5月までの21年間に刊行された論文として48篇が収録されている。このうち翻訳の1篇(36)は除くとしても、脱落の2篇<sup>39)</sup>を加えれば、49篇、さらに、その後の論文<sup>39)</sup>を加えれば55篇以上を数えることは確実である。これに1983年の日本シュトルム協会設立以後、急に増加する報告等も考慮するなら、シュトルム研究は非常に活発なものになってきているといえよう。

発表論文では、やはりノヴェレに関するものが最も多く24篇に及ぶ。内訳は Der Schimmelreiter 及び Carsten Curator を論ずるもの夫々4篇、Immensee と Aquis submersus に関するものが夫々3篇、あと Marthe und ihre Uhr; Im Schloss; Eine Halligfahrt; Draussen im Heidedorf; Ein stiller Musikant; Im Brauerhause; Zur Chronik von Grieshuus; Es waren zwei Königskinder などに関して夫々1篇、全体で個々の12作品についての作品論が22篇、その他2篇となる。主なる論文を挙げよう。

宮内芳明：シュトルムにおける悲劇性——“Zur Chronik von Grieshuus”をめぐって (33)

瀬川美音子：Th. Storm: “Es waren zwei Königskinder” 一人の少年の死 (38)

平田達治：シュトルムの短編小説『水に沈む』——そのモチーフ構成を中心に—— (45)

Hirata, Tatsuji: Storms Novelle “Aquis submersus” (50)

石井不二雄：シュトルムの時代意識と斬新な様式——『城の中』について—— (51)

石渡 均：シュトルムの『財産管理人カルステン』について (56)

西野雅二：テオドア・シュトルムの『白馬の騎者』について (58)

\*宮内芳明：Der Schimmelreiter——その現代像 [日本大学松戸歯学部一般教育紀要11号 1958]

鈴木道男：シュトルムの『白馬の騎者』——その「枠」の構造と機能について—— (62)

松井 勲：シュトルム『荒れ野の村で』 (68)

— : シュトルムの『醸造所で』における中世的なもの (69)

田中宏幸：シュトルムの短編小説『ハリヒ行』について (70)

深見 茂：シュトルムの『インメン湖』について (71)

三浦 淳：シュトルムの『管財人カルステン』について (74)

詩人シュトルムにあつて重要な抒情詩に関しては、これに反し論文は少なく1967年前にはわずかに1篇(13)、1967年以後も3篇を数えるに過ぎない。

五木田浩：テオドール・シュトルムの抒情詩の理論と展開 (35)

田 中 宏 幸

田川基三：シュトルムの詩あれこれ——解釈のこころみ—— (41)

他である。しかし山口四郎氏の『ドイツ韻律論』(三修社 1973)と『ドイツ詩を読む人のために』(郁文堂 1982)には夫々数篇のシュトルムの詩が分析されていて参考になる。

伝記的研究に関連しては既に触れた石丸氏のベルタ・フォン・ブーハン研究の第2/3部が1968/1970年に発表されたが(31,34)、これらは後にまとめて1985年同氏の文学論集『愛の孤独について』(沖積社)のなかに『シュトルムの青春』(63)として収められた。さらに

高橋健二：作家の生き方——シュトルムの場合 (40)

も全般的には伝記的記述に重点があり、80ページ以上に及ぶ記述は目下のところ最も詳細な「シュトルム伝」であろう。詳細という点では、さらに以下の部分的論考が参考になる。

宮内芳明：ハイリゲンシュタット時代のテオドル・シュトルム (43)

— : ハーデマルシェン時代のシュトルム (75)

先述のように、1967年以前も、シュトルムとその文学のもつ様々なアスペクトは、既にテーマとなっていたが、1967年以後も政治(39)、宗教(43)、音楽(54)などの関連について、さらに比較的論考、また「水」や「花」などのモチーフ研究、そして包括的なシュトルム論などが発表されている。

平川祐弘：西欧抒情詩の一波動 シュトルムと日本の詩人たち (29)

前田千鶴子：シュトルムの作品における「水」と「花」のモチーフ (53)

守永敏夫：シュトルム論の試み (55)

曾我部式子：Storm における“die weisse Wasserlilie über der dunklen Tiefe”の系譜 (66)

尾関 毅：一つの Th. Storm 像 (72)

\*守永敏夫：シュトルムとマン [中央学院大学教養論叢 第1巻第1号 1987]

などに注目しておきたいが、とりわけ平川氏の研究は、シュトルムが日本文学に及ぼした影響を論証された労作で、本邦唯一の比較文学的シュトルム研究論文である。本報告でも特に I に関して、この研究に多々啓発されるところがあった。

研究文献に関連して恐らく有名なマン(1930)及び、ルカーチ(1909/11年)の「シュトルム論」の翻訳について言及する必要があるだろう。前者は1971年『トーマス・マン全集IX評論I』(新潮社)のなかで『テオドル・シュトルム』として、また後者はこれより2年前の1969年『ルカーチ著作集1』(白水社)のなかで『市民性と芸術のための芸術——テオドル・シュトルム——』として刊行された。

シュトルム研究に関連して最後に「日本シュトルム協会」について紹介しておきたい。このシュトルム文学研究団体は1982年筆者が提案、特に宮内芳明氏の強力な支持を得て準備を進め、最初は広く愛好家を会員として予定したのであるが、結局主としてゲルマニスト諸家の協力のもとに1983年5月発足。以後年2回の研究会を開催、また情報交換のための会報の発行(年2回、1988年9月で12号)、研究団体の性格を強めるものとなった。1983年には筆者がフーズムの

シュトルム協会を訪問、シュトルム文学研究・普及についての相互交流など協議、特にフーズム側からは研究情報・資料提供などの協力に好意を示された<sup>37)</sup>。翌年1984年10月の日本独文学会（金沢）では「シュトルム文学の諸相」と題して主に、そのノヴェレに関してシンポジウムを開催<sup>38)</sup>、また今年5月、同学会（東京）で「十九世紀作家としてのシュトルム」なるテーマのもとに、Der Amtschirurgus—Heimkehr, Der Herr Etatsrat, Hans und Heinz Kirch; 抒情詩の形式を中心に、シュトルムを特に現代を先取る時代としての十九世紀の作家としてとらえ、新しいシュトルム像の確認を試みた<sup>39)</sup>。この成果はフーズムで9月開催の「シュトルム没後百年記念シンポジウム」で“Storm in Japan”として1967年以後の我国のシュトルム受容の状況と共に報告された<sup>40)</sup>。

なお、同協会ではシュトルム没後百年を記念し、シュトルム小伝を含む12論考を収める論文集を目下準備中である。ここに収録予定で『シュトルム書誌』に掲載されていないが、既に口頭も含めて発表済みの論文を挙げれば次の通りである。

石橋道大：シュトルムの詩形式における古いものと新しいもの

石渡 均：『ポーレ・ポッペンシュペーラ』について

田中宏幸：シュトルムと十九世紀ドイツの音楽文化 [金沢大学教養部論集・人文科学篇  
26-1号 1988]

深見 茂：『お雇い床屋——帰郷』における帰郷のモチーフ

別本明夫：『ハンスとハインツ・キルヒ』における父子葛藤

松井 勲：『顧問官』の博物学的考察——ホモ・サピエンスへの疑念

## V

以上我国におけるシュトルム文学の受容の状況を、ドイツ語教科書、翻訳、研究という面からみてきたのであるが、以上を要約すれば、日本では、シュトルムは既に明治時代後期頃から、先ず旧制高等学校のドイツ語教科書として親しまれ、さらに大正・昭和に入ってから、翻訳によって、その文学はまた一般の読者にも迎えられていたが、とりわけ1945年以後の第二次大戦後に急速にテキストや翻訳の出版が増加、著しくポピュラーになった感がある。その際、戦前は特に『みずうみ』に代表される初期の作品の影響が大きく、一方、戦後はその後期の作品にも次第に関心が払われるようになったが、しかし、全体的にみれば、やはり依然として、初期から中期の作品が好まれているという受容状況が浮かび上がってくる。他方シュトルム文学研究は、翻訳などに付された解説類を除けば、本格的に始まるのは戦後のことである。そして最近のテキスト・翻訳出版、一般読者の関心の退潮傾向とは対照的に、シュトルム研究はますます活気を呈しつつあり、あたかも量的な受容の消極性を質的に補っているかのようである。

ところで、シュトルム文学はドイツ本国では、どのように受け入れられてきたのであろうか。

## 田 中 宏 幸

ここで、簡単にその変遷に注目しておきたい<sup>40</sup>。シュトルムは当時の他の作家に比較して作品量が少なかったということも関係しているかも知れないが、生前には、その作品はそれほど一般には迎えられたわけではなかった。Aquis submersus や Der Schimmelreiter のような傑作も同じ運命であったことについては、先にも折りにふれ言及したが、またその1868年刊行の全集は1877年まで、わずか3100部の売上しかなかったというデータも報告されている。ドイツでシュトルムがポピュラーになるのは、当時の著作権保護期間が経過した1917年以後、第一次大戦後であるといわれている。これはまた1900年頃から自然主義に対抗して起こってきた、いわゆる「郷土文学」運動にも支えられ1936年頃まで25点の作品集が出版され、にわかにはその人気が高まってきたものようである。学術的にも高く評価されてきた Köster 編の8巻の全集 (Insel, Leipzig 1919/20) はこの時期のモヌメンタルな出版である。しかし、やはり大々的な普及は第二次大戦後のことで、1947~67年の20年間に、東西ドイツで教科書まで含めれば、シュトルム文学の出版は、実に900万部以上の部数を数えるという。驚くべき数である。こうしてシュトルムは「十九世紀後半の最もホピュラーな……ドイツの作家」<sup>41</sup> となった。東独の Goldammer 編による4巻の全集 (Aufbau, Berlin/Weimar 1956/67) は、またこの時期の代表的出版である。このようなドイツでの戦後の人気は、先にみた我国の状況と呼応するものようで興味深い。しかし、ドイツでは、その後も1975年には Honnefelder 編の選集 (Insel, Frankfurt/M)、1981年には Neunzig 編の全集 (Nymphenburger, München)、1983年には Insel 社から先の選集に基づくペーパー・バック版が刊行され、1987/88年、さらに詳細なコメントを伴う本格的な全集4巻がフーズム・シュトルム協会の Laage 教授及びキール大の Lohmeier 教授により出版 (Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt/M)、極めて充実したものになってきた。この点我国の最近の一般的退潮はドイツの傾向とは軌を一にしない。

このようなドイツでの一般的普及は、しかし絶えず正しいシュトルム像を伝えてきたわけではない。シュトルム文学の発表当時の受容の低調さの一つの原因は、専門家の消極的な論評の影響もあったといわれている<sup>42</sup>。すなわち、特にフォンターネが「フーズム鼻負」Husumeri<sup>43</sup>と称したシュトルム文学の舞台の狭さが、ある時はポジティブにも作用したが、しばしばネガティブに受取られた。「牧歌的」シュトルム像もこれに関連するであろう。この点「郷土文学」運動は有利であったが、1917年その生誕百年の年の論調の主流は「郷土」詩人から、「ドイツ国民的志向」、「北ゲルマン的自然観」という歪曲された評価を示すに至っている。これは、後にナチズムに迎えられるという、好ましからざる傾向の素地を準備していたわけである。

このような歪められたシュトルム像が修正されるためには、戦後の1945年以後を待たなくてはならなかった。これには戦後いち早く1948年フーズムに設立されたシュトルム協会 Theodor-Storm-Gesellschaft が大いに貢献したのである。こうして「フーズム鼻負」に象徴された「郷土詩人」はシュトルム自身の「私は内面的に広く見るためには、外面的には狭さが必要なのです」<sup>44</sup>という言葉との関連で再認識され、また牧歌的雰囲気の中の様々のコンフリク

トなどが正当に読とられ、さらに教会制度・貴族階級の特権の否定に代表される民主的基本態度、そして官僚主義や市民社会の独善への批判などに代表されるシュトルムの、時代に先がけた政治・社会批判も注目されるようになった。その抒情詩はまた、孤立化しがちな現代人に語りかける「極度な主観性」<sup>46)</sup>の表現としてとらえられ、さらに、その文学の形式と本質の分ち難い関連も論証され、その基本的底流として「無常感」と「死」のテーマが響いていることも明らかにされた。このようにして新しい、かつ真実のシュトルム像が形成されるに至ったのである。

このようなシュトルム像からみると、我国一般のこれまでのシュトルム理解は、『みずうみ』に代表される一見「牧歌的・抒情的」シュトルムと受取られるが、深く耳を傾ければ、この初期の作品にも、既にシュトルムの全作品に込められている無常感のグルントトーンは響いているのであり、必ずしも歪められたシュトルムではない。柰太郎や立原もこのシュトルムを読取っていたに違いない。そして一般の読者も甘美な抒情性の底に響く、この調子を、少なくともかすかに聞取っていたはずである。ゲーテ、シュトルム、ヘッセ、マンという岩波文庫に見られるドイツ文学受容のパターンは、決して「牧歌的・抒情的」なシュトルムのみによってもたらされたものではない。案外直感的に若い感性は、その本質を感じていたのではないか。そして、それはなお現代の世代にも、語りかけるものをもっているであろう。もちろん、より後期の作品の、また別の芸術的価値は認めなくてはならないが。この点我国のシュトルム研究は、ドイツでのシュトルム評価の最近の傾向に充分対応しているといえよう。

シュトルムは確かにトーマス・マンの言葉を借りれば「巨匠であり、巨匠であり続ける」<sup>47)</sup>であろうが、やはり何より独特の魅力ある作家、愛される詩人であり続けるであろう。そして、その文学はなお、全世界で読まれるであろうし、読みつがれていい文学である。それはインメンゼーであっていいのではなからうか。「シュトルムといえば『湖畔』以外に読むものがないかのように」<sup>48)</sup>読まれていいのではないかと私は思う。因にレクラム文庫が今年刊行した『ドイツ文学基本文庫』Basis-Bibliothek のなかにシュトルムの一冊があり、それが *Immensee; Marthe und ihre Uhr; Im Saal; Im Sonnenschein; Späte Rosen* を収めたものであるが、それは岩波文庫や新潮文庫の選択と同様、やはり適切な選択であろう<sup>49)</sup>。

## 注

- 1) Takahashi, Kenji: Theodor Storm und Japan. In: Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft 17. 1967. S. 55.
- 2) 例えば Theodor Storm Werke, hrsg. von Gottfried Honnefelder. Frankfurt/M 1975 Bd. 1, S. V; Laage, K. E.: Theodor Storm. Leben und Werk. Husum 1980, S. 88; Theodor Storm: Gesammelte Werke, hrsg. von Hans A. Neunzig. München 1981. Bd. 1, S. 12 など参照.
- 3) 柴田 齊訳『シュトルム全集』第2巻、東京、1984.
- 4) 大学生の読書生活 87年版、大学生協連読書調査委員会編集、東京、1987.
- 5) 宮内芳明：書誌、日本におけるテオドール・シュトルム—研究と翻訳— [ドイツ文学81号、1988, S.

- 163ff. 以下『シュトルム書誌』と略す。
- 6) 東京大学図書館提供の同書コピーによる。
  - 7) 寺内ちよ：ドイツ時代の鷗外の読書調査－資料研究－ [比較文学研究 6号、1957, S. 106ff].
  - 8) 同論文 S. 125.
  - 9) 平川祐弘：西欧抒情詩の一波動 シュトルムと日本の詩人たち [国文学、解釈と鑑賞、1968年7月号、S. 15ff.].
  - 10) 上田 敏全集（上田敏全集刊行会編）東京、1978、第1巻、S. 106.
  - 11) 同書 注、S. 619f. による。
  - 12) 本文献に関しては、東京大学図書館提供の「鷗外文庫」の蔵書のコピーを参考にした。
  - 13) 上田 敏全集 第8巻、S. 42.
  - 14) 平川祐弘：上掲論文参照。
  - 15) 木下柰太郎：一高時代の回顧 [全集第12巻、東京（岩波書店）1982, S. 392].
  - 16) 高橋英夫：偉大なる暗闇、東京、1984, S. 48.
  - 17) 例えば『南蛮文学雑話』 [全集第13巻、S. 21ff.] など。
  - 18) 以上は、平川祐弘：上掲論文による。なお Heute, nur heute の訳詩は上掲の木下柰太郎全集には収録されていない。
  - 19) 立原の1937（昭和12）年1月18日付書簡に「『みずうみ』は高等学校一年の日の、秋ふかいころ、竹山先生に習った。」とある。 [立原道造全集、東京、1973、第5巻、S. 277].
  - 20) 室生犀星：我が愛する詩人の伝記、東京、1958, S. 124.
  - 21) 全集 第5巻、S. 146, 158, 212, 218, 221, 222f., 227, 231, 277 など参照。
  - 22) 全集 第1巻、S. 17. なお1935年9月21日付書簡 [全集第5巻、S. 158]参照。
  - 23) 全集 第3巻、S. 136, 180 参照。
  - 24) 立原はシュトルムの Wenn die Äpfel reif sind; Posthuma,; Veronika; Marthe und ihre Uhr を1936年に翻訳、Marthe を除く3篇が『林檎みのる頃』として山本文庫の一冊として刊行された。現在『全集』第4巻、371ff. 及び S. 428ff. に収録されている。なお訳稿の最後に、短い「ノオト」が付されている [同 S. 400 参照].
  - 25) 小松伸六：シュトルムと私 [石丸静雄訳：みずうみ（旺文社文庫）1966, S. 174ff.].
  - 26) 郁文堂刊行書目 [創業八十年記念誌、東京、1979、所収].
  - 27) 五木田浩編資料 Theodor Storm in Japan [本稿 168ページ参照] による。
  - 28) 『シュトルム書誌』による。なお、テキスト類の全面的収録はもとより困難であるが、同資料に未収録の10点を以下に補う。  
 Im Saal 柿原編、同学社、1959  
 Posthuma 加藤他編、東洋出版、1980  
 Ein grünes Blatt 猿田編、朝日出版社、1961  
 Hinzelmeyer 五木田編、朝日出版社、1970.  
 Im Schloss 北村編、南洋堂、1940.  
 Von Jenseits des Meeres 番匠谷編、郁文堂、1952.  
 In St. Jürgen 番匠谷編、三修社、1949.  
 Von Kindern und Katzen 加藤他編、東洋出版、1980  
 Aus engen Wänden [Bötjer Basch]立沢剛編、南洋堂、1935.  
 Bötjer Basch 田川基三編、三修社、1955.
  - 29) ここには『シュトルム書誌』にもれた次の5点を加え、かつ Meine Erinnerungen an Mörike を除いている。  
 Im Sonnenschein 茅野訳『日光の中』岩波文庫、1937.  
 Angelika 川崎芳隆訳『黄昏れゆく青春』蒼樹社、1947.



Auf der Universität 塩谷訳『少女ローレ』創元文庫1952.

In St. Jürgen 国松訳『聖ユルゲンにて』郁文堂、1948.

Aquis submersus 川崎訳『睡蓮の賦』蒼樹社、1947.

30) これに前注の岩波文庫と創元文庫の2点加わる.

31) 岩波文庫編集部1988年6月20日付の回答によると、ドイツ文学のベスト・セラーは次の通りである。部数はすべて概数。

若きウェルテルの悩み 40万部；みずうみ 35万部；ファウスト(第1部) 34万部；車輪の下 25万部；トニオ・クレエゲル 24万部

32) これ以外に新潮文庫で『みずうみ』の一冊が入手できる。かつて点数を誇っていた角川文庫にはシュトルムのタイトルは見当たらない。

33) 以下参照の便宜のため『シュトルム書誌』のナンバーを付す。

34) 『シュトルム書誌』では(B)報告等の1に収録。

35) 以下の引用では文献の前に\*を付す。

36) 本稿171ページ参照。

37) これについては『BRUNNEN』に掲載の拙稿参照。『シュトルム書誌』(B)報告等2, 3。

38) 『ドイツ文学』74号(1985)S. 190ff. に掲載の報告(文責：田中宏幸)並びに『日本シュトルム協会会報』5号(1984)参照。

39) 『ドイツ文学』81号(1988)S. 191ff. に掲載の報告(文責：深見茂)及び『日本シュトルム協会会報』12号(1988)S. 2ff. 参照。

40) これは筆者がフーズムのシュトルム協会の招きにより、シュトルム没後百年記念シンポジウムに出席、報告の予定であったが、差支えのため渡独できず、同協会のラーゲ教授が代読された。原文は1989年に西ドイツで公刊されることになっている。

41) 以下は主として次の文献による。Freund, Winfried: Theodor Storm. Der Schimmelreiter. S. 105ff.; Honnefelder, Gottfried: Einleitung. In: Theodor Storm Werke. Frankfurt/M (Insel), Bd. 1, S. I~VI; Laage, K. E.: Theodor Storm. Leben und Werk. Husum 1980, S. 87ff.

42) 上掲 Honnefelder S. V さらに、Vinçon, Hartmut: Theodor Storm, Stuttgart 1973, S. 70 など参照。

43) Laage 上掲書 S. 88 など。

44) Fontane, Theodor: Von Zwanzig bis Dreissig による。ただしフォンターネは全体的にはシュトルムを高く評価していた。

45) シュトルムの1881年9月21日付 Hermione von Preuschen 宛書簡にある。例えば Theodor Storm Briefe, hrsg. von. P. Goldammer, Berlin/Weimar 1984, Bd. 2, S. 225ff. に所収。

46) Laage 上掲書 S. 91.

47) Mann, Thomas: Theodor Storm (1930)のなかの言葉。

48) 川崎芳隆訳『黄昏れゆく青春』東京、1947の「あとがき」(S. 279)による。

49) 1988年10月よりNHKドイツ語講座でテキストとして Immensee が取上げられていることを付記する。

TANAKA, Hiroyuki: Storm-Rezeption in Japan——anlässlich des 100. Todestages des Dichters

Kontakt: Prof. Hiroyuki Tanaka, Seminar für Germanistik, Universität Kanazawa, Marunouchi 1-1, KANAZAWA/Japan.